風の末裔シリーズ・番外

～　ヤチブキ　～

©西風そら
http://nisikaze.sakura.ne.jp

木々の間から、白く尖った頂が、三つ並んで見える。あの峰の残雪は、真夏にならないと消えない。
遠くからでもよく見えるので、この辺りに住まう者からは、三峰(みつみね)と呼ばれ、山行の目印となっている。

白い三角を真上に見ながら、幼い女の子が、谷の斜面を歩いていた。傾斜が急なので、歩くというよりは、ほとんど這うような感じだ。
「あった…」
湿った地面に、鮮やかな黄緑を見付けた。ひとつ、ふたつ…、かじかんだ指先で、小さな若芽を大事に摘んで、腰の山菜袋に入れる。
峰を見上げると、夕暮れの闇が掛かっている。この辺りで引き返さないと、谷で夜に巻かれてしまう。
今しがた、ほんの少し増えた山菜袋を開いてみた。何回覗いたって、増える訳ではない。
女の子は口をキュッと結んで、更に斜面を山奥に歩いた。あの角を越えると、何か生えているかもしれない。
もう少し…、袋を覗いて、一杯感があるくらい採れなきゃ。帰り道ちょっと暗くて怖いのをガマンする方が、このまま帰るよりはずっといい。

それに、暗くなってから帰ったら、ちょっとくらい頑張ったって思って貰えるかもしれない。
膝と掌には、転んで擦りむいた血が滲んでいる。大して痛くないし、そんなのに構っている暇はない。今は、袋を一杯にする事だけなのだ。
頑固な笹藪に足を取られ、意地悪な木の根が作った土壁をやっと乗り越えると、目の前が開けた。

「ひっ!」
思わず声が出てしまった。
恐ろしい獣や蛇なら、反射的に、声を圧し殺す事が出来る。思いもしない者がいたから、びっくり声が出たのだ。
開けた所は、川が広く浅瀬になっていて、ヤチブキの花が咲き乱れている。黄色い絨毯が覆った中洲に、自分と同い歳くらいの子供が二人、いたのだ。
二人は男の子で、声に反応してこちらを向いた。山岳民族特有のカラフルな帽子の下の目が、やけにキラキラしている。
心細い夕暮れの山中で人に行き合うと、普通の子供はホッとする物だが、女の子は、背筋に悪寒が走った。
だって、こんな時間に、こんな所に子供がいるなんて、おかしい。いや、自分は別にして。

普通の家の普通のお父さんは、夕暮れの危ない山に、子供を行かせたりはしない。

「はあ――ん」

赤っぽい黒髪の背の高い子供が、おかしな声を出しながら、こちらに近付いて来た。

「ひっく…」

女の子は喉がひきつって、悲鳴も出なかった。

その子は普通なのだが、後ろから覗く背の低い方の子供が、やっぱり明らかにおかしい。顔が真っ黒なのだ。かまどの消し炭を塗りたくったみたいな焦げ茶の頬の上に、山猫みたいな黄色い瞳。そして帽子の下から覗く髪が、真っ白だ。

二人の子供は、こわばって動けない女の子に、斜めに近寄った。

「僕達が見えるみたいだぜ」

「あは！　センサイな子供には見えるって、父者(ててじゃ)が言ってた。・・センサイって何？　キロロ」

「分かんなかったら言うなよ、ハルル」

男の子達は、その睫毛が見える近さにまで、迫って来た。

「あああ――!!」

女の子が大声を上げて、両拳を無茶苦茶に振り回した。

「おっと」

二人は、二歩下がって避難した。

「『センサイ』って『凶暴』って意味だっけ？　キロロ」

「『弱虫』って意味かもしれないよ、ハルル」

「うあ、うあああっ」

二人が退いた隙に逃げようと、女の子は背後の土壁を登ろうとした。しかし、いかんせん、背が足りない。

足が届かず、滑ってジタバタした拳句、泥田にビシャンと落っこちてしまった。

「あーあ」

二人の子供の足が近付く。もう逃げられない。

冷たい泥にしゃがんだまま、女の子は、身体を丸めて目をつむった。谷の地霊は、子供を拐って、冷たい水の底に沈めて、魂を食べるっていう。

両側から、肘を掴んで引っ張られた。

「いややややいやだ」

「さっきからうるさいな」

「女ってうるさいから嫌だ」

「こいつ怪我してる」

「ホントだ」

掴まれたまま、ズルズル引きずられた。やせっぽちの女の子の力じゃ、抵抗のしようがない。
ザブンと川に放り込まれた。雪融けをたっぷりふくんだ水は、心底冷たくて、心臓まで凍らせる。
この冷たい水底に沈められて、食べられちゃうんだ…。

…・・・??
そのまま、何も起こらなかった。水に沈められる事もない。恐々と目を開けてみた。周囲には誰もいない。
よく見ると、自分が座り込んでいる水たまりは、足の甲くらいの浅い所だった。
歯をガチガチ震わせながら、お尻で這って水から上がった。そして、自分の手と膝に、ヤチブキの葉が巻かれているのに、気付いた。いつの間に…?
気付いたら、ジンと痛みが来た。
女の子は、茫然と考え込んだ。
ヤチブキの葉は、血を止めて、腫れを抑えてくれる。大昔、まだお母さんが元気だった頃、そう教わった。
あの男の子達が、怪我をした自分をここまで運んで、傷口をきれいな水で洗って、薬草まで巻いてくれたっていうの?
まさか、信じられない。
男の子って、石を投げたり物を取り上げたり、弱い者を虐める事しか考えない生き物の筈。
普通の子供は親切を受けると、素直に有難がるのだが、この女の子は、混乱して怯えた。だって、村の大人にも子供にも、誰にだって、こんな風に手を掛けて貰った事など、ない。

夕闇が、女の子を、現実に引き戻した。帰らなくちゃ。
立ち上がって、よろめいた。原因は足の怪我ではなく、腰の山菜袋だった。
中には、ウドとイタドリの新芽が、ぎっしり詰まっていた。
それが、女の子がその日、谷で出会った不思議のすべてだ。

＊＊＊

夕暮れの谷を、一人の少女が、早足で駆けていた。
初春の残雪残る斜面は、今の自分でも往生する。私、よくあんな小さな子供の時、こんな所まで歩いて来たなあ。今でもチビでやせっぽちなのには、変わりがないけれど。
薄衣で来たので、谷の冷気がジンジンと凍みる。もっとも、上衣を羽織ってくる余裕なんか、なかった。

谷にずんずん分け入り、シダに被われた頑固な木の根を這い

登ると、目の前が開けた。
「あった…」
思わず声が出た。
小さい時に、一度きり来た記憶の通り。広くて平らな地形で、流れが穏やかに広がった、黄色いヤチブキの園。木々の切れ目から届いた空の光が、水面にキラキラしている。
だが、今の彼女には、それをキレイだと思うゆとりは、なかった。
少女は浅瀬を歩いて、川の中洲に辿り着いた。明るい陽射しに照らされたそこだけ、泥んこの谷の中で、別世界だった。
あの時は、この場所に、二人の男の子が立っていた。

小さい自分は、部落へ帰ってからも、二人の子供の事は話さなかった。
大人に、袋一杯の山菜の説明を求められても、闇雲に歩いていたら、たまたまウドの林に行き当たった、と答えた。
秘密にするのに、特別に理由があった訳ではない。
ただ、この季節にこんなに山菜が採れる訳がないと問い詰める大人に、反抗したかっただけだ。山に追い立てておきながら、恥ずかし気もなくそう言い切る大人に。
あの子供達は、何だったのだろう。

今から考えると、離れた所に連れの大人がいたのかもしれないし、自分のよく知らない山奥に住む部族なのかもしれない。
自分は小さかったし、本当に人ならざる者だったかどうかは、怪しい。ただ、あの後ろにいた子供の異様な雰囲気は、幼心に忘れられない。

物想いにふけったのは一瞬で、少女はすぐに、上流へ歩き出した。下流から、人の声とザバザバ歩く水音が、聞こえて来たからだ。
さっきの清涼な場所を過ぎると、もう谷は暗くて陰湿な顔に戻っている。
目の前に、黒い巨大な岩がそそり立っていた。足場を捜してやっと這い登った所で、絶句した。
いきなり、垂直な滝になっていた。水量は多くないけれども、見上げるように高い。そして滝壺の大きな淵は、底がないかと思うくらい、深く黒くえぐれている。
両側の岩盤も切り立って湿った苔に覆われ、とても登れそうにない。人の入る場所なら、こういう滝には迂回路があるものなのだが、それは見当たらなかった。
要するに、この先は人間の領域ではないって事だ。
後方に、知った声のざわめきがする。

水を蹴って歩く足音は、思ったよりも多い。
少女は慌てて脇の斜面に取り付いた。しかしそちらは、一面に太い笹が下向きに密生していた。頑固な茎がバリケードのように身体を跳ね返し、一歩たりとも登れない。
逃げ口を探してうろうろしている間に、人の声が大岩のすぐ裏までやって来た。次の瞬間には、もう見付かってしまうだろう。
探す目的を、逃げ道から別の物に切り替えた。こういう場所にならある筈…。
「あった…」
それを見付けて、少女は覚悟を決めた。

谷を遡って来た数人の男は、水に逆らいながら滝の中を登る少女を見付けた。確かにこういう地形は、実は水が叩いている所の方が滑らず、足場があるのだ。
「馬鹿者！　戻れ！」
男の一人が叫んだ。
「今なら許してやる、早く降りて来んか！」
少女は登るのをやめない。
一人の男が、持っていた石弓を構えた。
「傷を付けるな、買い叩かれる」
「脅しだ、当てはしない」
「もうあの高さじゃ、落としちゃまずい…あっ！」
弓を放つ前に、掴んだ岩が崩れ、少女の身体が滝から離れた。そうして悲鳴も上げず、その形のまま滝壺に落ちた。
男達は、慌てて水際に駆け寄った。
少女の頭に巻いていたスカーフだけが、浮かんで来た。身体は多分、滝壺の魔に持って行かれたのだろう。
「何てこった、馬鹿めが」
男の一人が、スカーフを拾って、怒りに任せて引き裂いた。
「手付け金を貰っていたのに。返さねばならなくなったではないか」
「仕方がない、ガキの頃から反抗的な奴だった。金をかけて育てたのに、大損害だ」
男達はぎゃあぎゃあ喚きながら、大岩を降りて行った。
その五月蝿い声が遠ざかって…

――　ざぶん　――

滝壺の淵に、頭が突き出した。
「う〜〜ぃ」
それはしかし、少女ではなかった。猫みたいな白い髪から滴を垂らして、小柄な少年が、勢いよく水から上がった。

「耳に水が入っちまった」

笹藪が揺れて、赤っぽい黒髪の少年が立ち上がった。

「さすが、ハルルは息が長いな」

彼の足元では、真っ青な少女が、半裸で丸まって、ガチガチ震えている。

「誉める所、そこ？　キロロ。我ながら芸術的なダイビングだったと思うんだけれど？」

白い髪の少年は、身体をぶるんと振るって水滴を飛ばし、シダの向こうに脱ぎ捨てた自分の衣服を、拾いに入った。

程なく、カラフルな民族衣装に戻った少年が、少女の粗末な衣服を振り回しながら、やって来た。

「濡れちまったけれど、絞れば着られるだろ？」

少女はまだ、膝に顔を埋めて、身を縮めている。

「いつまで震えてるんだよ、寒いのはこっちだってぇの」

「ひえっ！　ひいっ！　いやあっ！」

少年の焦げ茶色の手が肩に掛かると、少女は感電したみたいに悲鳴を上げた。

「何だよ、こいつ」

「いきなり押さえ付けられて着ている物を剥ぎ取られたら、そりゃ、普通の女の子は、怯えるんじゃないかい？」

赤毛の少年の方が、絞った衣服を受け取って、少女の傍らにそっと置いた。

「行こう、ハルル」

「行くの？　キロロ」

「下の部落の者には関わるモンじゃないって言われているだろ」

「先に手出ししたのは、キロロの癖に…」

「そりゃ…、ああ…」

赤毛の少年は、思い出したように、さっき彼女の手からむしり取ったフスの葉を、パラパラと足元に落とした。

「一応言っておくけれど、それ、口に入れたら、もうこの世に戻って来られない。まあ、知らなかった訳じゃないんだろうが」

木々のざわめきの中に二人の気配は遠ざかり、少年の声の最後は、遥か滝の上方に消えた。

＊＊＊

麓の様子は変わっても、あの白い三つの峰だけは変わらない。残雪の谷を歩きながら、娘は三峰を仰ぎ見た。

ここに来る前に通り過ぎて来た、子供時代を過ごした部落は、すっかり寂れて廃村となっていた。もっとも大した思い出もないので、彼女には何の感慨もない。

座った事もない椅子や、入る事を許されなかった母屋が、泥を被って朽ちているのを見ると、返って晴々(せいせい)とした気分になれた。

谷の道は、彼女の記憶よりずっと長い。今の方が歩幅も力もある筈なのに。

「ああ、あの時も、次の時も、必死だったものね…」

思わず口を付いて出た。

最初は、山菜袋を一杯にして帰らないと棒で打たれる恐怖に駆られて、小さな足で、這いずり歩いた。

次は、畑労働から帰ると待っていた、死神みたいな人買いの恐怖から逃れる為、この道を逃げた。

あの頃の自分を思い出すと、今でも胸がつかえる。

追っ手から逃げおおせたのは、本当に奇跡だった。逃げ切れなかったら命を終わらせる覚悟でいたからだろうか。

それを切っ掛けに、自分の運命は切り替わった。

あの後、暗くなってから谷を抜け出し、部落を避けて山を降りた。

大きな街で下働きから始めて、一生懸命働くと、ちゃんと評価して貰えた。物覚えは良いし利口だしと評判が立つと、良い雇い主が現れた。

意欲を示すと、教育も受けさせて貰えた。

そして自分が、多兄弟の末っ子だから無駄に生まれたって訳ではなく、親だから無駄な子供はどう扱ったっていいって訳でもない事を、知った。

そんな風に子供の未来を摘み取る大人しかいない村は、結局朽ちて滅ぶのだという事も。

見覚えのある大きな木の根が見えた。背が伸びた今でも苦労するその壁を登ると…。

「あった…」

また口を付いて声が出た。

平らな地形の、穏やかな流れの広場。でも、記憶にある感じより、大分狭い。キレイだと感じる余裕のなかった昔の方が、竜宮城みたいに思っていた。

明るい川の中洲に立ってみた。水面は相変わらずキラキラしている。ヤチブキにはまだ少し早くて、残雪のそこここに、蕾をもたげた若芽が立ち上がった所だ。

その横を通り過ぎて、黒い大岩を登った。

「ああ…」

やっぱりあった。夢じゃなかった。苔とシダに覆われた、切り立った滝。こちらは記憶通り、やはり険しくて高い。

娘は岩をつたい歩いて、地獄の釜みたいな滝壺を見下ろした。
あの時は怖くてちゃんと見られなかったけれど、こんな滝壺に落ちたのなら、大人はそりゃ、見限るだろう。誰一人、ほんの一瞬も、助けようともしないで。

また胸がつかえて来たので、顔を上げて滝を見た。
そう、こんな高い滝から、こんな怖い水底へ、自分の為に、落っこちてくれたヒトがいる。命を絶つ事で逃がれようとした自分を、当たり前に、止(とど)めて叱ってくれたヒトがいる。
それらの事実を言葉にして噛み締める度に、心に光が射して力が湧いて来るのだ。だから、新しい街で、独りで、頑張れたのだ。
街で学んで、世の中には色んな肌や髪の色の人間が、普通にいるって知った。いや、彼らが人であろうが妖怪であろうが、もうそんな事はどうでもいい。
大切な事は、もっと別の所にあったんだ。
人生で、ただ長く一緒にいたって、何にも残らない人がいる。ほんの一瞬しか関わらなかったのに、一生残るヒトもいる。

娘は息をすうっと吸って、胸を張った。
「ねえ、キロロさん、ハルルさん！」

滝上に向かって、大きな声で叫ぶ。
「私、…えっと、あのね、この間求婚されたの。それでね、受けようと思うの。とってもとっても優しい人だわ。子供が安心して帰って来られる、暖かいおうちを作るの」

滝はどうどうと流れ落ちる。
最初は気恥ずかしかったが、他人に聞かれる事なんかないんだ。娘は滝上の真青(まさお)な空を見て、高らかに言った。
「今、とても幸せに生きているわ。貴方がたのお陰です。本当にありがとう」
昔、言い損ねた言葉。
古(いにしえ)から変わらずただ流れ落ちる滝を、しばらく眺めてから、踵を返して帰り道に付いた。大岩を降りて、先の広場が見えた時、娘は目を見開いて、胸が一杯になった。
中洲の白い残雪の上に、黄色いヤチブキの花が、お祝いの飾り付けのように、丸くこんもりと、積み上げられていた。

〜おしまい〜

二〇一四・三・二